

第3回若手科学者サミット報告

山崎 哲*1・木下 武也*2

1. はじめに

若手科学者サミットは、日本学術会議の若手アカデミー (<http://www.scj.go.jp/ja/scj/wakate/> 2018年6月25日閲覧) が主催する、各研究分野における若手の会組織及び研究者個人間の学術交流を目的とした会で、今年で3回目の開催となる。第3回は、2018年6月4日に日本学術会議講堂にて開催され、日本気象学会(以下、気象学会)の人材育成・男女共同参画委員会の推薦で気象気候若手研究者交流会(Young Meteorologists' Overnight-sessions; 以下YMO, 釜江ほか 2018) 幹事として筆頭著者が参加した。今回の参加者は40名程度で、第2回サミット(木下・江口 2017) 同様に、第1部は若手研究者による研究報告、第2部はポスターでの若手の会の活動報告が行われた。第3部はパネルディスカッションで、今回は「よい研究とは」というテーマで議論が行われた。

2. 第1部：若手研究者による研究報告

学会や学会若手会の推薦を受けた若手研究者7名が、自身の所属する学会や若手会の紹介と、自身の研究についての講演を行った。今回の推薦学会は、日本心理学会、日本基礎心理学会、日本疫学会、日本教育行政学会、日本顔学会、日本ゲノム微生物学会と気象学会(人材育成・男女共同参画委員会)で、専門が大きく異なる多様な若手研究者による講演が行われた。第1部の講演については優秀な講演者1名に若手アカデミー賞が贈られた。

講演者は博士課程の学生から、おそらく博士取得後数年の研究者がほとんどで、中堅というより若手が多い印象を受けた。分野が異なると研究の方法やプレゼンの手順がかなり違っていた。印象として、人文・社会科学系の発表では研究の目的意識を明白に述べる傾向があり、そのおかげか異分野でも発表をしっかりと把握できた。ここで筆頭著者も気象学会の若手研究者の動向や自身の研究についてできる限り紹介させていただいたが、来年度以降はもっと若手の学会員の皆様に講演にチャレンジしていただきたい。

3. 第2部：若手の会活動報告ポスターセッション

学会推薦の若手会11団体が、若手会の活動についての発表を行った。各団体から1~3名程度の講演者がポスターの説明を担当していた。分野は、人文・社会科学系、医療系、物理系、工学系、地球科学系といった構成であった(第1表参照)。著者らは、人材育成・男女共同参画委員会とYMOの活動について報告した。

他団体で印象に残ったポスター発表についていくつか示す。まず関心を持ったのが、若手会の活動期間として、10年以上の長期にわたってオフィシャルに活動を続けている会の存在である。ここでのオフィシャルとは、学会の委員会の一つとして活動することを指す。会の幹事は数年ごとに代替わりするそうだが、会の活動度は幹事のモチベーションで年々変動しつつ継続させているとのことであった。いくつかの若手会は最近立ち上げたもので、中には立ち上げに向けてこの若手サミットに参加し情報収集してきた会もあった。有志数名で学会公認の会とすべく立ち上げを行ったらしい。オフィシャルな活動には一長一短あるようで、メリットとしては学会からの活動費を若手会として運営できること、活動の広報がしやすいことなどがあ

*1 (連絡責任著者) Akira YAMAZAKI, 海洋研究開発機構. yzaki@jamstec.go.jp

*2 Takenari KINOSHITA, 海洋研究開発機構. t-kinoshita@jamstec.go.jp

© 2018 日本気象学会

第1表 ポスターセッションでの発表若手会と講演者の所属(括弧内)一覧。

若手の会(発表者所属)
日本放射光学会若手部会(物質・材料研究機構)
日本心理学会若手の会(東北大学, 金沢大学)
日本基礎心理学会若手研究者特別委員会(九州大学)
日本疫学会 疫学の未来を語る若手の会(帝京大学, 愛知県がんセンター研究所)
細胞生物若手の会(東京大学)
日本顔学会 若手交流会(千葉大学)
資源・素材学会 資源・素材若手ネットワーク(秋田大学)
日本産業衛生学会生涯教育委員会若手研究者の会(帝京大学)
水産学若手の会(水産研究・教育機構)
日本気象学会 人材育成・男女共同参画委員会, YMO(海洋研究開発機構)
ビーム物理研究会・若手の会(日本原子力研究開発機構 J-PARC, 早稲田大学)

り、デメリットとしては、例えば、公式な学会員でない若手会の活動に参加できないといった、活動に制約が生じること、委員会としての業務が必要となること、幹事の引き継ぎが必要となることなどを伺った。ある若手会では学会からの要請で会をオフィシャル化したものもあり、どの学会でも若手会の重要性が認識されているという印象を受けた。

次に気象学会のポスターについて印象に残ったコメントを挙げる。一番多かったコメントは、人材育成・男女共同参画委員会での「キャリアエクスプローラログ」についてであった。他学会ではそういった試みは見ることがないようで、求人マッチングにおいて良いシステムであるとの意見をいただいた。分野によっては研究者の異動が多い学会もあり、そういった場面で効果的だろうとの意見が寄せられた。また、託児施設斡旋など、多くの試みで気象学会は先進的であるとのコメントをいただいた。男女共同参画の活動については、学会での男女構成比も関係するためか、問題意識に分野間での差異があるようで、この若手サミットは相互理解の場として役に立ちそうだ。他にも、ここでの本題からはずれるが、「学生の頃に『天気』を読んで勉強しました」という他分野の若手研究者もおり、気象学会の社会への貢献度の高さを再認識した。

YMOの活動についてのコメントは、参加メンバーの構成(若手研究者の定義)をどのように決めているかについて特に質問があった。一つは、年齢・キャリア

的な上限をどこに設けるかについてで、これに関してYMOは現在厳密な規定を設けていない。他の若手会では若手アカデミーに倣って45歳未満としているところもあった。我々の分野では、数回のYMOの経験から、厳密な規定は必要ないだろうと思っている。もう一つは下限をどう設定するかについてで、YMOでは第3回までは原則博士課程3年以上、第4回では博士課程1年以上としていた(YMOは過去4回開催されている)。下限の対象設定は他の若手会に比べて高いようで、対象キャリアを引き上げて「中手」会としている点が興味深いとの指摘をいただいた。これは、どうしても構成員に研究キャリア初期のメンバーが多すぎると、構成員間での専門的な議論が難しくなったり、構成員の学生が就職して連絡が取れなくなったりといったことがあり得るため、あえて中手に絞ることは会の活動度を高めるために良いかもしれない、というコメントであった。一方でそれによって敷居が高くなってしまいうデメリットもある。しかしながら、素晴らしいことに、気象学会ではYMO以外に気象学会の学生が主体の若手の集会在存在する。「若手夏の学校」(最新では、吉岡ほか2017)などの活動が、全国の大学の連携と協力によって10年以上の長きに渡って自発的に維持されている。この学生主体の若手集会和YMOとで協力し相補的に発展していくことでデメリットを克服できそうである。両者の活動を今後も継続していくことが重要であると強く認識した。その他に、若手会への参加に指導教員などの推薦者を必要とする会もあった。YMOでは推薦者を必要とせず、かつ気象学会員に限定せず、幹事の引き継ぎも陽に行っていない(釜江ほか2018)。このように低負担で緩やかに質の高い会を続けていけるのかどうか、今後が楽しみである。

今回のサミットには、若手アカデミーが若手の定義を45歳未満としているためか、博士後期課程の学生からいわゆる中堅まで幅広い年代の「若手」が参加していることがわかった。若手の担い手は年齢・研究キャリアに厚みを持っている方が、若手研究者層を維持していく上で有益だろう。そういった点からも、気象学会の幅広い層の多くの若手がサミットに参加して他学会の若手と大いに相互作用してほしいと感じた。

4. 第3部：パネルディスカッション「よい研究とは」

パネルディスカッションでは、文部科学省、財務

省、(株)ベネッセコーポレーション、自然科学研究機構から5名のパネリストが登場し、「よい研究」とは何かについて議論がなされた。パネリストの講演では、研究を評価する仕組みや研究予算について大いに議論が盛り上がった。特に、研究の「よさ」を評価する指標として「トップ10%論文」(被引用回数が上位10%に入る論文)数を使うことについての議論が白熱した。ここでは、パネリスト間だけでなく会場の参加者とのやりとりも十分に行われ、参加者の声が議論の壇上に届きやすい場だと感じた。科学技術の予算や評価について現場で立ち会うパネリストも参加しており、この議論を聴講するだけでも若手サミットへの参加に十分価値があるかもしれないと思った。また、様々な分野の若手研究者が、研究評価や研究費について研究者サイドの現場で感じていることを聞くこともできた。同じ若手研究者間でも、人文・社会科学系や生命科学系の若手研究者の意見と我々地球科学系の分野で耳にする意見には類似や相違があって興味深かった。

今回、参加者からの口頭での質疑のほか、“sli.do”(<https://www.sli.do/> 2018年6月25日閲覧)というシステムを使ったチャット形式での質問も行われた。事前に受け取った(会議用に設定された)パスワードを入力しチャットにログインし、会議の開始前から最中までコメントが随時受け付けられた。チャッ

トでは、「いいね」の多く付いたコメントが優先的にチャットの上部に移動する仕組みになっている。司会者が適宜チャットに挙がったコメントをパネリストに質問し、それに応じて議論が進んで行くという方法がとられ、今回の規模のパネルディスカッションで大変有効に利用されていた。

5. まとめ

多くの学会が、若手会を重要視していること、そして若手研究者同士が学会間の交流や連携を必要としていることを強く感じるサミットであった。文系・理系などの分野を超えた若手の交流の機会はなかなか得られないので、今後も継続されることを期待する。今回、大きな国際学会等のタイミングもあって気象学会からの参加者は1名であったが、次回からはもっと多くの(中堅を含む)若手研究者がこういった集會に積極的に参加して欲しいと感じた。

参考文献

- 釜江陽一ほか, 2018: 第4回気象気候若手研究者交流会開催報告. 天気, 65, 643-648.
- 木下武也, 江口菜穂, 2017: 第2回若手科学者サミット報告. 天気, 64, 929-930.
- 吉岡大秋ほか, 2017: 第29回日本気象学会夏期特別セミナー(気象若手夏の学校)開催報告. 天気, 64, 835-837.